「男、突っ走る！」

第59回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内 雅也	（21）	名古屋芸術専門学校3年生	
木内 孝志	（50）	雅也の父	
木内 真保	（48）	雅也の母	
木内 健次郎	（17）	雅也の弟	
眞榮田 浩平	（21）	名古屋芸術専門学校3年生	
福沢 瑞枝	（21）	名古屋芸術専門学校3年生	
長井 夏美	（21）	名古屋芸術専門学校3年生	
加藤 直也	（21）	名古屋芸術専門学校3年生	
大久保 正樹	（25）	名古屋芸術専門学校3年生	
植野 雪奈	（21）	名古屋芸術専門学校3年生	
野添 美南	（22）	名古屋芸術専門学校3年生	
船倉 篤志	（21）	名古屋芸術専門学校3年生	
奥村 裕司	（22）	名古屋芸術専門学校3年生	
山口 拓海	（21）	名古屋芸術専門学校3年生	
安永 和也	（21）	名古屋芸術専門学校3年生	
本部 明美	（20）	名古屋カフェ調理専門学校1年生	
渡部 康太	（41）	名古屋芸術専門学校教務課長	
鈴島 孝雄	（54）	名古屋芸術専門学校入学事務局長	
吉野 茉由	（27）	名古屋芸術専門学校入学事務局員	
鈴本 貴広	（46）	名古屋芸術専門学校講師	
藤堂 香	（56）	名古屋芸術専門学校講師	
堀江 朝日	（37）	名古屋芸術専門学校講師	
堀内 泰正	（60）	名古屋芸術専門学校講師	
山浦 重幸	（60）	名古屋芸術専門学校講師	
安本 真苗	（56）	『スクエア・トラスト』代表取締役社長	
桑島 百合子	（50）	『スクエア・トラスト』社員	

1　『スクエア・トラスト』・事務所

N「二月上旬、この日は僕にとって、フリーペーパー制作をしていた『スクエア・トラスト』最後の勤務日となっていました」

雅也が片づけをしている――安本、桑島が仕事をしている。

雅也「片づけ終わりました」

桑島「何だか寂しくなるわね。木内君が辞めるとなると」

安本「不思議と木内君がいると、社内が明るくなってた気がするわ」

雅也「とんでもない。本当に短い間でしたが、お世話になりました。こちらでは、本当に良い経験をさせていただきました」

桑島「これからフリーになるんでしょ。頑張ってね」

安本「一人でやってくとなると、いろんな壁にぶち当たることがある。でも、木内君なら乗り越えられると思うわ。学生事業部なんて実績も作ってくれて、無事に後任の事

業部長も決まったんだもの」
雅也「書き手が必要になったらいつでも呼んでください。すっと飛んできますから」
安本「頼もしいわね」
笑いあう一同。
N「その夜は、学生事業部で携わってくれた大学生も合流して、僕の送別会をしてくれました」

2　展示会場

N「数日後、僕にとって最後の『卒業進級制作展』が開催されました」
学生たちの展示会が行われている――来場客にそれぞれ応対しているスーツ姿の学生たち。
イラストや漫画の展示、ゲーム体験ブースなどの設えがされている。小説・雑誌ブースには、雅也の作品集『島の人々』や、歴史雑誌『栄新名所図絵』が展示されている。

映像ブースには、短編ドラマ『ＣＲＥＧＧ』の台本が設置され、モニターで映像が流れている。

裕司が台本を手に取って読んでいる――浩平がやってくると、

浩平「おっくー」

裕司「お疲れ。これか、うっちーが脚本書いて、みずちゃんが撮影して、眞榮田が監督やったってやつ」

浩平「うん。うっちーと大久保は、出演もしてる」

裕司「この『ＣＲＥＧＧ』ってどういう意味？」

浩平「クリエーターの卵っていう意味だよ。今の俺たちの状態を現してるんだ」

裕司「なるほどね」

浩平「最後にみんなと良い作品が作れて良かったよ」

裕司「（感慨深く）そっか……」

3　居酒屋（夜）

雅也、浩平、瑞枝が飲んでいる。

雅也「終わっちゃったね、とうとう」

瑞枝「二日間、あっという間だった」

浩平「まあ特に二人は、あつぽんと一緒にお手伝いスタッフやってたからね」

瑞枝「手伝いでも結構大変だった。うっちー、よくあんな大変な実行委員会、二年もやったね」

浩平「俺も去年やったけどさ、あれは経験がものを言うな。前回もさ、うっちーだけじゃなくて、ぐっちやあつぽんやおっくーっていう一年生から実行委員やってるメンツが揃ってたから、スムーズに行ったと思うんだよ。でも一年の時は、何の勝手も知らなくて大変だっただろうな」

雅也「まあね。でも、今となっては単位ももらえたし、良い経験になったよ」

瑞枝「単位と言えば、うっちーって結局……」

雅也「うん。見事、三年間皆勤賞でした」

浩平「すげえな」
雅也「この間、教務の渡部先生から聞いたんだけど、何でも俺、専修学校連合会っていうところから、愛知県知事賞っていう賞をもらえるらしいんだって」
瑞枝「そりゃ、在学デビューもして、三年間皆勤なんだから、その功績が認められたってことでしょ」
雅也「そうなのかな」
浩平「やっぱりうっちーらしいな。最後まで学校に居座って」
雅也「最後か……」
不思議そうに雅也を見つめる浩平と瑞枝――雅也、涙をこらえ始めるが、やがておしぼりで目をあてがう。
瑞枝「うっちー、どうしたの？」
浩平「何だよ、急に」
雅也「これが最後なんだなって思うとさ……」
浩平「今泣いてたら、卒業式どうするんだよ」
瑞枝「そうよ。ハンカチじゃ足りないんじゃ

ない？」

雅也「泣かないように努力します」

瑞枝「絶対泣くわ」

浩平「まだ学校には行くのか？」

雅也「学校のパソコンの中の共有フォルダにデータあるからね。そういうのも全部ハードディスクに移そうと思って」

瑞枝「あ、そうだよね。私もそれやらなきゃ」

浩平「展示会終わっても、まだ雑務整理ってのが俺たちには残ってるみたいだな」

4　名古屋芸術専門学校・全景

5　同・４階・廊下

雅也が風呂敷を解いて、中の重箱の蓋を開ける――二段構造になっており、一段目にチーズケーキ、二段目にチョコレートケーキが入っている。

と、４０１教室から瑞枝が出てくる。

瑞枝「甘そうな匂いがすると思って来ちゃっ

た」

雅也「今日、バレンタインでしょ。最後だからね、思い切って二種類作ってきた。あれ、みずちゃんはもしかして」

瑞枝「私は食べる専門なの」

雅也「はいはい」

と、エレベーターが開き、雪奈が出てくる。

雪奈「あれ、もしかしてうっちーのバレンタイン？」

雅也「うん」

と、４０２教室から篤志と袋を持った和也が出てくる。

篤志「バレンタインだから、やっすーがお菓子配ってくれるって」

雅也「やっぱりやっすーも作ってきたんだ」

和也「最後だからね」

と、袋からタッパーを取り出し、可愛いデコレーションをしたお菓子を見せる。

雪奈「やっすーは、相変わらず女子力高いね」
瑞枝「うちの学校は、男子のほうが女子力高いんだもん」
雅也「みずちゃん、それ自分で言っちゃう？」
瑞枝「自虐よ、自虐」
雪奈「（篤志たちに）二人とも、パソコンのフォルダ整理」
篤志「俺は補習」
雅也「え、まさかあつぽん、まだ卒業単位足りてないの？」
篤志「そうです」
雅也「間に合う？」
篤志「間に合わせます」
雅也「あ、ねえみんな、前に連絡したと思うけど、来月の、ちょうど卒業式一週間前に遊ぶイベント、来れるよね？」
一同「もちろん！」
雅也「よし！」

6　名古屋駅・表（一ヶ月後）

雅也が待っている――と、篤志がやってくる。

篤志「うっちー」

雅也「あつぽん、早いじゃん。まだ集合時間まで十五分あるのに」

篤志「こういうのは、早く着いたほうが良いと思って。うっちーも早かったね」

雅也「今日の晩の居酒屋の場所も確認しようと思って。一同引き連れていくでしょ、迷子になって場所分からなくなると迷惑かかると思って」

篤志「さすがは幹事。ご苦労様です」

雅也「そろそろ、みんな来る頃かな」

7

アミューズメントパーク

バドミントンをしている雅也、浩平、瑞枝、雪奈――雅也と瑞枝、ずっと空振りしている。

浩平「おいおい大丈夫か」

瑞枝「ダメだ、文化部で運動音痴がバレる」

雅也「同じく」
雪奈「ほら、もう一回行くよ」
×　×　×
バレーボールをしている篤志、裕司、和也、拓海――篤志、華麗なサーブを見せる。
裕司「マジかよ」
和也「すげえな、あつぽん」
拓海「今のは無理だわ」
篤志「さあ、かかってこい」
N「日中はアミューズメントパークで遊び、その日の晩は、居酒屋で食事をした後、まさかの二次会のカラオケには、全員がオールするつもりで揃ってしまいました」

8　カラオケ・Aルーム（夜）
浩平が歌を歌っている――正樹が鼾をかいて眠っている。歌の合いの手を入れている拓海、裕司、和也、直也。
和也「大久保の鼾、うるさいな」

裕司「結構飲んでたもんな」
拓海「ほっとく？」
直也「いや、起こすか」
浩平「（マイクを持ったまま）起きろ、大久保！」
正樹「（勢いよく飛び起きて）え、もう朝？」

9　同・Bルーム

雅也と瑞枝が歌っている――歌が終わり、拍手をする夏美。

夏美「良かった」
雅也「びっくりしたよ。今日歌わないって言ってたのに、これなら歌えるって言い出すんだもん」
瑞枝「ちょっとね、歌いたくなっちゃって」
雅也「そういえば、ゆきちゃん大丈夫かな？大久保たちと一緒に、結構飲んでたからね」
夏美「今、あつぽんが付き添ってるよ」

10　同・表

酔い潰れている雪奈――ペットボトルの水をもって介抱している篤志。

篤志「植野さん大丈夫、少しは楽になった？」

雪奈「うん……ごめんね、あつぽん」

篤志「良いよ。それよりもさ、今日眞榮田と一緒だったけど、大丈夫だったのか？」

雪奈「もうお互いに吹っ切れたの。それに、最後なんだもん、変な空気にはしたくないしね。私たち子どもじゃないんだもん、それぐらいのことはわきまえてる」

篤志「（苦笑して）そっか」

11　カラオケ・Bルーム

夏美が歌っている――手拍子を打ってノッている雅也。目がうつろうつろしながら、やがて雅也にもたれかかって眠ってしまう瑞枝。

雅也、ハッとなって思わず、瑞枝の寝顔を見つめる。

12　木内家・居間（朝）

N「そして一週間後。ついに卒業式の日がやってきました」

孝志、真保、健次郎が朝食を食べている――スーツ姿の雅也が、慣れた手つきでネクタイをしながら入ってくる。

雅也「そろそろ出るよ」

真保「（食べ終わって）はいはい」

健次郎「そっか。今日、兄貴卒業式か」

雅也「うん。三年間、あっという間だった」

孝志「もうすっかりネクタイ締めれるようになったな」

雅也「まあね。三年間の間で、結構ネクタイ締めること多かったし」

健次郎「（真保に）母さんも今日、卒業式出るんだろ」

真保「お兄ちゃん駅まで送って、その後一旦戻って着替えてから出るの」

孝志「じゃあ、雅は今日俺が送ってくわ。（と雅也に）もう出るのか？」

雅也「うん。会場がホテルでしょ。道が分からなくなると困るから、早く出る」
孝志「（食べ終わって）よし、じゃあ出るか」
雅也「行ってきます」

13　ホテル・表

『卒業式』の看板が立てられている―
―スーツ姿の男子学生は、袴姿の女子学生が入っていく。

14　同・ロビー

雅也と袴姿の瑞枝が写真を撮っている。
瑞枝「後で送っとくね」
雅也「ありがとう。謝恩会も袴？」
瑞枝「ううん。私もなつ姐さんも、式が終わったらドレスに着替える」
雅也「またすごいものが拝めそうだわ」
瑞枝「ちょっと、うっちー」
雅也「じゃあ、また後でね」
と、歩いていくと、正装姿の真保が入

ってくる。

雅也「母さん、すぐここ分かった？」

真保「バスがなくてね、歩いてきたわ」

雅也「大丈夫だった？」

と、袴姿の明美が通りかかる。

明美「うっちー先輩」

雅也「明美ちゃん」

明美「写真撮りましょう」

雅也「良いよ。（とスマホを真保に渡して）ごめん、撮って」

真保「はいはい。撮るよ、はいチーズ（と撮影する）」

雅也「（鞄から手紙を出すと）明美ちゃん、これ手紙書いたの。またゆっくり読んで」

明美「私にですか？　ありがとうございます。ぜひ時間作って東京来てください」

雅也「うん、必ず行く」

15　同・大広間

渡部と吉野が司会進行をする中で、式

典が執り行われている――学生席に座っている雅也、浩平、瑞枝、夏美、直也、正樹、雪奈、美南、篤志、裕司、拓海、和也、明美、その他学生たち。

職員と講師席に座っている鈴島、鈴本、藤堂、堀江、堀内、山浦、その他講師や職員たち。

保護者席に座っている真保、その他引率の保護者たち。

×　×　×

渡部「皆勤賞授与。名古屋芸術専門学校三年、木内雅也」

雅也「はい（と立ちあがり登壇していく）」

夏美、藤堂、真保がそれぞれの席からスマホでその様子を動画撮影していく――見守るように雅也の登壇を眺める藤堂と真保。

雅也、校長から皆勤賞を受け取り、一礼する――拍手をする一同。

16　同・謝恩会会場

学生や講師たちが集まって談笑している――その中で、雅也が、雪奈と鈴島、浩平、夏美、瑞枝、裕司と拓海とそれぞれ自撮りをしている。

×　×　×

雅也が美南と自撮りをしている。

美南「後で送って」

雅也「うん。グループにアップするわ」

美南「ありがと」

と、音楽が鳴り、ステージで余興が始まる――夏美、浩平、正樹がブルゾンちえみのネタを披露している。笑いながらその様子を見ている一同。

×　×　×

講師たちが一人ずつ挨拶をしていく――学生たちが花束を贈呈。

×　×　×

雅也、藤堂に花束を渡し、抱擁する。

N「謝恩会は余興のほかに、講師たちの挨拶

と共に学生の花束贈呈が行われるなど、式典の厳かな雰囲気とは違い、賑やかものになりました。卒業式では泣かないようにしようとしていたのですが……」

17　同・表

ハンカチに目を押さえた雅也が篤志と雪奈に支えられながら出てくる。

雪奈「いつまで泣いてるの」

雅也「だって、涙止まらないんだもん」

篤志「楽しい三年間だったから、泣きたくもなるんだよな」

雅也「うん……」

篤志「うっちー、また会えるって」

雪奈「そうだよ。いつでも会おうよ」

雅也「あつぽん……ゆきちゃん……」

N「大半の同級生とは、この卒業式が一旦しばしのお別れとなってしまいました。この後、僕はナミや藤堂先生をはじめとした文章系のメンバーとの懇親会に参加し、その

後眞榮田からアミューズメントパークで遊んでいるからという呼び出しがあったため、懇親会終了後に眞榮田と合流しました。そして朝まで遊び……」

18　名古屋駅・改札前（翌朝）

雅也、浩平、瑞枝、夏美、正樹、直也、拓海が集まっている。

浩平「じゃあな」

雅也、瑞枝、夏美、ふと涙を流す。

浩平「泣くなよ。一生会えなくなるわけじゃないんだから」

雅也「けどね……」

浩平「いつでも会えるさ」

一同しんみりとしている。

19　電車の中

雅也、瑞枝、夏美が乗っている――電車が止まる。

夏美「じゃあ、私ここだから」

雅也「またね、なつ姐さん」
瑞枝「東京でも会おうね」
夏美「うん（と降りていく）」

20　電車の中～駅
雅也と瑞枝が乗っている――電車のスピードが遅くなる。
瑞枝「次降りるんでしょ、うっちー」
雅也「うん。最後まで、みずちゃんと一緒だったね」
瑞枝「東京行く前に、『とんちゃん』行こう。また連絡する」
雅也「分かった。じゃあ、連絡待ってる」
と、駅を降りていく――見送る瑞枝。
N「卒業式が終わり、僕はとうとう三年間の専門学校生活を終えてしまいました。ですが僕にはまだ一つ、やり残したことがありました」

つづく